

旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史認識の変化

——南スラヴ理念の系譜に関する記述をめぐって——

The Changes of Understanding of History in the Yugoslav Successor States:
An Overview of Descriptions of the Yugoslav Idea in History Textbooks

石田 信一

Shinichi ISHIDA

要旨

本稿の目的は、この四半世紀の間に劇的に変化した旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書における南スラヴ理念の系譜に関する記述を取り上げ、その歴史認識の変化を把握することにある。両大戦間期のユーゴスラヴィア王国時代から、南スラヴ諸民族の統一国家としてのユーゴスラヴィアの建国を正当化するために歴史教科書の中で南スラヴ理念の系譜が強調されてきた。これは第二次世界大戦後に社会主義体制の連邦国家として再編されてからも変わらず、連邦構成共和国がそれぞれ発行する歴史教科書の中では南スラヴ理念の発達について独自の章が設けられるほどであった。一九八〇年代末のクロアチアやセルビアの近代史教

科書にはその傾向が顕著に見られる。しかし、一九九〇年代初頭に既存の連邦国家が解体すると、各共和国では新たな「国民史」の創造が求められ、歴史教科書から他の旧ユーゴスラヴィア諸民族の歴史は抹消され、南スラヴ理念の系譜もまったく言及されなくなった。南スラヴ諸民族史あるいはバルカン地域史の視点を持つものもあるが、必ずしもそこに力点が置かれているわけではない。それでも、歴史家をはじめとする教育関係者の働きかけによって歴史教科書の見直し作業は継続的に行われており、そうした努力が狭量な「国民史」一辺倒の歴史認識をあらためさせる契機となることが期待される。

はじめに

ユーゴスラヴィア連邦共和国 (SRJ: *Savezna Republika Jugoslavija*) が二〇〇三年にセルビア・モンテネグロに再編され、ユーゴスラヴィアという名称を持つ国家が消滅してから一〇年以上が経過した。一九二九年にセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国 (*Kraljevina Srba, Hrvata i Slovenaca*) の改称によって正式に採用された「ユーゴスラヴィア」という国名は、その国制が中央集権的な王国から連邦人民共和国 (FNRJ: *Federativna Narodna Republika Jugoslavija*)、そして社会主義連邦共和国 (SFRJ: *Socijalistička Federativna Republika Jugoslavija*)へと変わっていく中でも維持されてきたが、一九九二年にスロヴェニアやクロアチアの独立を経て連邦共和国として再編された時点ですでに南スラヴ諸民族の統一国家としての枠組みは失われており、そうした実態がようやく国名にも反映されたと見ることもできる。現在、旧ユーゴスラヴィア地域には七つの独立国、すなわちスロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、セルビア、コソヴォ、マケドニアが存在し、かつて「友愛と統一」をスローガンとしていた南スラヴ的連帯はそこには見られない。むしろ近年ではこれらの国々の間で領土問題が顕在化しており、一九九〇年代の紛争をめぐる戦争責任の問題なども絡んで緊張状態が続いている。

旧ユーゴスラヴィア諸国の関係が冷却化し、敵対的でさえある実情は、各国の学校で用いられる歴史教科書にも反映されている。かつて南スラ

ヴ諸民族とその国家の歴史を網羅的に描き、統一国家形成に至る南スラヴ理念の系譜を記述していた各国の歴史教科書は、いまではクロアチアではクロアチア史、セルビアではセルビア史のように「国民史」ばかりを描くようになり、ユーゴスラヴィア時代を概して批判的に取り上げ、あげくは南スラヴ理念が存在したことさえ忘れたかのように見える。

本稿はこの四半世紀の間に劇的に変化した旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書における南スラヴ理念の系譜に関する記述を取り上げ、その歴史認識の変化を把握することを目的とする。クロアチアだけでも、歴史教科書を素材の一つとして歴史認識の問題を取り上げた論考が、これまで雑誌『歴史教育』^①や『歴史家対話』^②、あるいは国際会議などに基づく論文集、例えば『バルカンのクリオ』^③、『クロアチアの民主的転換』^④、「記憶の文化」シリーズ^⑤に掲載されている。また、日本での先行研究は少ないが、より広範なバルカン史の枠組みでは、柴宜弘編『バルカン史と歴史教育』^⑥、柴宜弘監訳『バルカンの歴史——バルカン近現代史の共通教材』^⑦などがあり、日本とスロヴェニアとの共同研究の成果『学校の歴史と教科書』^⑧も刊行されている。本稿で取り上げる「ユーゴスラヴィア主義」に関する最近の研究として、山崎信一氏の論考も有用である。これらの先行研究を参照して、旧ユーゴスラヴィア諸国における歴史認識の変化という問題に取り組みたい。また、史料としては、旧ユーゴスラヴィア時代の、そして現在の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書および学習指導要領のうち、とくに義務教育段階のものを使用する^⑨。なお、本稿ではやや特殊な訳語を使用している場合があることをお

断りしておく。⁽¹⁾

本稿は平成二五年度跡見学園女子大学特別研究助成費（研究課題「連邦解体後の旧ユーゴ諸国における歴史認識の変化」）による研究成果の一部である。

1. 両大戦間期の歴史教科書

ユーゴスラヴィア王国が発足した当初から、その歴史教科書には南スラヴ理念の系譜に関する記述が少なくなかった。例えば、一九三二年にベオグラードで出版されたギムナジウム向け歴史教科書には、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の精神的「一体性」と題する章が設けられている。やや長くなるが、その冒頭部分は以下の通りである。

一九世紀後半におけるイタリア人やドイツ人のように近代になつて単一の独立した民族国家に統一を果たしたヨーロッパ諸民族は、それ以前から精神的・文化的「一体性」を具現していた。同じように、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人も出自において、言語や民族的特徴において、そして意識において、単一の国家への政治的統一を達成する以前からそうであった。

同じ言語と似た習慣から、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人が一つの民族であるという意識が衰えることはなかった。しかし、

民族意識が広まるのはヨーロッパ諸民族においても遅れており、フランス革命以降のことであった。同じ言語の民族が国家や州の歴史的境界で分断され、支配王朝や宗教によって相互の関係を悪化させた。

我々の民族は外国支配の時期に三つの支配者、トルコ人、オーストリア人、ヴェネツィア人の間で数多くの地方に分断された。トルコのセルビア人は多数、隣接するヴェネツィアやオーストリア諸邦に移住した。彼らはそこで良い兵士として大いに歓迎され、彼らによって軍政国境地帯が設けられた。こうしてセルビア人は大挙してダルマチア、リカ、ボスニア国境のクロアチア南東部、そしてスラヴォニアに移住した。ハンガリーがトルコ支配から解放されると、トルコの下にとどまったセルビアから南ハンガリーへのセルビア人の大移住が行われた。この移住によって古くからのセルビア人の居住地が北方につくられ、セルビア人とクロアチア人は分けがたく混じり合ってしまった。

こうして民族の混交が生じたが、宗教の違いは民族を一つの統一体とするのを困難にした。同じように、国境線が民族を分断し続けた。多種多様な政治的境界を除去するよりも精神的・文化的分裂をなくして文学的・文化的統一を実現する必要があった。最初に民族統一を成し遂げたのは文学者であり文化人であった。

まずは民族的な口承文芸、とくに民謡が、共通の民族的英雄や榮譽ある出来事について歌いながら、精神的「一体性」を保持させた。民謡やその語り手によって、さまざまな地方に住む人々が自らの共通の歴史を学んだ。この共通の歴史が民謡から詩人や文学者の手に渡った。ド

ウブロヴニクの詩人パルモテイチやグンドウリチは自らの詩でセルビアの君主を民族的英雄のごとく称揚した。ダルマチアの修道士アンドリヤ・カチチ・ミオシチは、彼が「スロヴィンスキ」という一つの民族とみなした南スラヴ人の過去を自著『スラヴ民族の愉快的な会話』で民謡の精神で歌いあげた。人々は彼の『愉快的な会話』を本名の自分の本として受けとめ、そこから統一と自由の感覚を焼きつけた。

早くから教養あるダルマチアの人々はロマンス系の同国人に対してスラヴ人がこの地方の先住民であり、イリリア人であって、大きく強力な単一のスラヴ共同体に属していると主張していた。ビザンツの人々は好んで彼らを古来の名称で呼んだ。人文主義者たちも同じであった。こうしてユーゴスラヴィア人に対してイリリア人という呼称が用いられるようになった。最初期のユーゴスラヴィア人歴史家であるドゥブロヴニクの修道士マヴロ・オルビニはイタリア語で執筆した『スラヴ人の帝国』（一六〇一年）においてスラヴ人を我々の国土の先住民とみなし、スラヴ人の広がりや一体性を褒め称えた。それによって彼は教養あるユーゴスラヴィア人の民族的誇りを高め、汎スラヴ主義、すなわちすべてのスラヴ人の一体性に関する理念の創始者となった。すでに一六世紀にはクロアチア人のヴランチチやスロヴェニア人のボホリチが自らの文法書で彼らの言語がヨーロッパとアジアの半分に広がっていることを誇っていた。¹⁵⁾

これ以降も、スラヴ人もしくは南スラヴ人の解放と統一を構想した人

物や作品の紹介が続いている。ユライ・クリジヤニチ、バヴァオ・リツター・ヴィテゾヴィチ、マテイヤ・アントウン・レルコヴィチ、ジョルジュ・ブランコヴィチ、ヨヴァン・ライチ、ドシテイ・オブラドヴィチ、ヴク・ステファノヴィチ・カラジチ、リュデヴィト・ガイ、ヤネズ・ブライヴァイス、ヨシブ・ユライ・シュトロスマイヤールである。このうち、ヴィテゾヴィチは、ハプスブルク家がクロアチア王として「イリリア語」が用いられているセルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、ブルガリアおよびスロヴェニアに対する権利を持っていると述べ、その統一を求めるとともに、共通の文章語の必要性を説いたとされる。¹⁶⁾ また、オブラドヴィチは「ユーゴスラヴィア統一の使徒」であり、

「宗派の違いは我々の民族の一体性を何ら妨げるものではないという考え」を示したとされる。¹⁷⁾ 言語に関しては、カラジチとガイによってセルビア人とクロアチア人に共通する文章語と正字法が採用され、「精神的一体性を実現した」こと、スロヴェニア人の間でも同じ正字法や語彙が用いられるようになったこと、そしてガイが民族的一体性を表現するために用いたイリリアという共通の呼称が広く受け入れられることはなかったものの、彼の運動を通じて「ユーゴスラヴィア人の精神的一体性が著しく強化された」ことが協調されている。¹⁸⁾ シュトロスマイヤールについては、「ユーゴスラヴィア人をユーゴスラヴィアという共通の名称の下に統一することを望んだ」人物であり、「ユーゴスラヴィア科学芸術アカデミーや大学、美術館その他の大規模な教育・文化機関をユーゴスラヴィア人の名称の下に創設し」、「ユーゴスラヴィア人の精神的・文化

の一体性を導き出した」という評価を与えている。¹⁶⁾

この教科書には「ユーゴスラヴィア人の共通の経済的利益」と題する章もあり、そこでも「ユーゴスラヴィア人は出自や言語、民族的伝統、文化において一つの民族であることを自覚していた。このほか、経済的利益も、彼らに外国支配からの解放と単一の独立した民族国家への統一の必要性を訴えるものとなった」¹⁷⁾ことが強調されている。精神的・文化的一体性を前提としつつ、経済的必要性もあつて、統一国家の形成は不可避であつたという筋立てである。なお、この教科書の最終章には「激しい政党間の抗争と民族の分裂を食い止め、民族的一体性と国家の統一性を強化し、全国的に法律を同質化するため、一九二九年一月六日、国王アレクサンダルは憲法を無効とし、議会政治を停止することを決定した。一九二九年一〇月三日の法律により、我々の国家はユーゴスラヴィア王国と呼ばれるようになった」¹⁸⁾という記述があり、ユーゴスラヴィアの改称の理由がごく簡単に紹介されている。

なお、こうした南スラヴ人の「精神的一体性」に関する記述は、一九三九年に同じくベオグラードで出版された中学校向け歴史教科書にも部分的に継承されている。この教科書には「ユーゴスラヴィア人の精神的一体性」と題する章があるが、「伝統的なユーゴスラヴィア理念」としてグンドウリチのスラヴ主義、ガイのイリリア主義、シュトロスマイヤーのユーゴスラヴィア主義が列記されている一方、前述の教科書とは異なり、クロアチアのクサヴェル・シヤンドル・ジャルスキやヴァトロスラヴ・ヤギチ、ヴォイヴォディナのミハイロ・ポリトール・デサンチチ、

セルビアのストヤン・プロテイチなど主として二〇世紀に入ってから政治家や知識人の活動に加え、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのボグダン・ジェライチやネデリコ・チャブリノヴィチ、クロアチアのルカ・ユキチやステイェバン・ドイチチといった革命運動家による反ハプスブルクの暗殺（未遂）事件が詳しく紹介されている。むろんサライエヴォ事件で知られるガヴリロ・プリンツィプの名前も挙がっている。この章は「精神的・民族的一体性の意識がすべてのユーゴスラヴィア人に浸透し、ユーゴスラヴィア人の青年層に断固たる行動をとらせた」とした上で、「民族的一体性の波が南スラヴ全体に広がり、すべての水門がその力強い流入をうけて緩み、決壊したのである」という歴史家ヴィクトル・ノヴァクの言葉で締め括られている。¹⁹⁾

2. 連邦時代の歴史教科書（1）クロアチア

第二次世界大戦後のユーゴスラヴィア連邦時代においても、歴史教科書は六つの連邦構成共和国単位で出版され、その内容は必ずしも統一されていなかった。一般的に、ヨーロッパ史あるいは世界史、当該共和国・民族の歴史、その他の連邦構成共和国・民族の歴史の三層構造となっており、独立後に顕在化する「国民史」の側面は早くから内在していたと言える。また、一九五〇年代までの教科書と六〇年代から七〇年代にかけての教科書、そして八〇年代の教科書では、内容的に明確な差異が見

られる。ここでは連邦時代の歴史教科書の特徴がもつとも明確にあらわれていると考えられる一九八〇年代末のものを取り上げたい。なお、連邦時代の教科書には労働運動や革命運動に関する記述が非常に多く、内容的にも興味深いものではあるが、本論のテーマとずれるため、ここでは分析の対象としない。

まず、一九八〇年代末にクロアチアで発行された小学校七年生向け歴史教科書⁽²⁰⁾における南スラヴ統一国家の形成過程に関する記述を見てみよう。

この教科書には「第一次世界大戦までのユーゴスラヴィア理念と民族問題の展開」という章があり、六頁もの分量がある。ここでは、最初に「ユーゴスラヴィア国籍を持つ我が国のすべての住民はユーゴスラヴィア人である。それは、彼らがユーゴスラヴィア国民であることを意味する。狭い意味でのユーゴスラヴィア人とは、南スラヴ諸民族、すなわちセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、ムスリム人、マケドニア人、モンテネグロ人のことである。住民の大多数が南スラヴ人であるため、我が国はユーゴスラヴィア社会主義共和国連邦と呼ばれる⁽²¹⁾」ことや「すべてのスラヴ人の想像上の祖国であるスラヴィア⁽²²⁾」という概念から、その南(ユーゴ)に位置するユーゴスラヴィアという名称が成立し、一九二九年に正式な国名として採用されたことが触れられている。

続いて、クリジヤニチ、ヴィテゾヴィチ、ガイ、ククリエヴィチからシウトロスマイエル、ラチユキに至るスラヴ理念ないし南スラヴ(ユーゴスラヴィア)理念の具体的な系譜が紹介されている。ここで取り上げ

られている人物が前述の両大戦間期の教科書とほとんど変わらないことは興味深い。南スラヴ諸民族の結束を強化しようとした試みとして、ガイが主導したイリリア運動、セルビア人とクロアチア人の共通語に関するウィーン合意(一八五〇年)、ククリエヴィチのユーゴスラヴィア歴史協会やユーゴスラヴィア科学芸術アカデミーの創設、「南スラヴ人の統一」を求めるリュブリャナ合意(一八七〇年)なども取り上げられている。また、最後には、それが必ずしも多くの人々に受け入れられたわけではなく、とくにクロアチア人とセルビア人の間では「大クロアチア主義」や「大セルビア主義」に至る独自のナショナリズムが発達し、いわゆる民族問題が顕在化したことに触れられている。前者の事例としてカラジチがすべてのシウト方言話者をセルビア人と見なしたこと、後者の事例としてスタルチェヴィチがすべてのシウト方言話者をクロアチア人と見なしただけでなく、スロヴェニア人を「山岳部のクロアチア人」と呼んだことが紹介されている。

なお、イリリア運動に関しては、それが「すべての南スラヴ人を結集させることに失敗し」、「一部のスロヴェニア人だけがそれを支持した⁽²³⁾」とされている。もともと、イリリア運動を取り上げた別の箇所(「一八世紀末から一九世紀前半にかけてのクロアチア諸邦」の章)では、「イリリア運動はクロアチア人だけの民族運動にとどまった⁽²⁴⁾」ものの、「南スラヴ人の間でユーゴスラヴィア理念を基礎づけた⁽²⁵⁾」と書かれており、イリリア運動の成果は南スラヴ理念との関連において、ある程度は評価されていると考えられる。

これ以外にも、教科書の随所に「ユーゴスラヴィア理念」と関連づけた記述が見られる。「新たなユーゴスラヴィア国家の創設を究極的な目標とする」一九〇五年の「クロアチア人・セルビア人連合」⁽²⁵⁾の形成や、一九一二年のザグレブでの学生ストライキに焦点をあてた「青年層のユーゴスラヴィア綱領」⁽²⁶⁾などが、その典型的な事例である。後者では、スロヴェニアのツアンカルの「オーストリア＝ハンガリーのユーゴスラヴィア人は、呼称・宗教・文字・方言あるいは言語の違いに関わりなく、すべてのユーゴスラヴィア人の民族的統一が最終目標であると考えている」⁽²⁷⁾という発言が引用されている。

3. 連邦時代の歴史教科書（2）セルビア

続いて、このクロアチアの教科書とほぼ同じ時期、一九八〇年代末にセルビアで発行された小学校七年生向け歴史教科書における南スラヴ統一国家の形成過程に関する記述を見ていくことにする。

この教科書の特徴は、クロアチアの教科書と比べても遜色のない南スラヴ理念に関する詳しい記述が見られることにある。「イリリア運動」と題する章には「イリリア運動のユーゴスラヴィア的性格とクロアチア民族再生に対する意義」⁽²⁸⁾という節があるほか、「一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのユーゴスラヴィア理念の出現と発達」⁽³⁰⁾と題する章が設けられている。このうち、前者については、ここで全文を掲載する。

ユーゴスラヴィア諸民族の民族的・文化的近親性に関する理解は、すでに人文主義の時代にあらわれていた。この理解は南スラヴ人をトルコに対する共闘に結集させるための表現としてあらわれた。イリリア派のユーゴスラヴィア主義は、一九世紀にすべてのスラヴ諸民族にあらわれた、すべてのスラヴ人が相互に結合しているという理念に刺戟されたものであった。民族再生運動においては、古代イリリア人はスラヴ人であるという確信があり、イリリア運動の支持者はすべての南スラヴ人をイリリア人と呼んだ。イリリア派はシュト方言をセルビア人とクロアチア人の共通語としてイリリア語と呼び、この言語をすべてのユーゴスラヴィア諸民族が受け入れることを求めた。

統一的なイリリア（ユーゴスラヴィア）民族を創出しようとするイリリア派の理念は他の民族には受け入れられなかった。各民族は独自の民族意識や文化を持っていたからである。イリリア運動の最大の功績はクロアチア民族に民族意識の覚醒をもたらし、民族文化を創造したことにある。このほか、イリリア派はすべてのユーゴスラヴィア諸民族の類似性とその政治的・文化的統一の必要性という理念を広めるのに貢献した。⁽³¹⁾

また、後者は「南スラヴ人の民族的近親性に関する最初の理解」、「ユーゴスラヴィア理念の発達のための経済・社会的前提条件」、「一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのユーゴスラヴィア理念の成熟」という三

節で構成されているが、クロアチアの教科書と内容的に大きな違いはない。ユーゴスラヴィア理念の先駆者としてのヴィテゾヴィチやガイに加えて、一九世紀半ばの南スラヴ諸民族の協力関係を代表する人物としてモンテネグロのベタル・ペトロヴィチ、ニエゴシユ、セルビアのカラジチ、クロアチアのシュトロスマイヤーの名前が挙がっている。また、セルビアのスヴェトザル・マルコヴィチ、スロヴェニアのイヴァン・ツァンカルといった各地の社会主義者とユーゴスラヴィア理念の関わりについて触れているのも、この時期の教科書の特徴と言えよう。この章の「まとめ」の部分は、以下の通りである。

南スラヴ人の共通の起源に関する知識は早期に出現したが、その統一をめざす政治的運動は我々の諸民族の間での資本主義経済の発達や民族ブルジョワジーの形成と関連して一八世紀末から一九世紀にかけて登場した。とくに南スラヴ人の連帯と統一をめざす運動が強まったのは二〇世紀初頭であり、その担い手は我々の各地方の闘争的な青年層であった。ユーゴスラヴィア理念の最大の敵は、我々の住民の半数以上を支配下に置いていたオーストリア＝ハンガリーであった。そのため、南スラヴ人の統一という理念の実現は、第一次世界大戦の終結によるオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊によって可能となったのである。³²⁾

クロアチアとセルビアの歴史教科書は全体的に見れば視点や評価が

異なる部分も少なくないが、ここで取り上げた二種類の教科書を見る限り、少なくとも南スラヴ理念の系譜を重視し、統一国家形成の必然性を説くという点で酷似していることがわかる。

4. 現在の歴史教科書（1）クロアチア

一九九〇年四月から五月にかけて、なおユーゴスラヴィア連邦を構成する共和国でしかなかったクロアチアとスロヴェニアで、第二次世界大戦後初めてとなる複数政党制自由選挙が実施され、両共和国とも、それまで一党支配を続けてきた共産主義者同盟が下野し、とくにクロアチアでは右派のクロアチア民主同盟が大勝して共和国における実権を掌握した。新政権は脱社会主義政策を推進しただけでなく、自らの主張してきたクロアチア民族主義を「クロアチア語」や「歴史」などの科目に反映することを求めたため、学習指導要領や教科書は抜本的な改変を余儀なくされた。一九九一年六月にクロアチアがスロヴェニアと同時にユーゴスラヴィア連邦からの分離・独立を宣言してからは、その傾向に拍車がかかった。

独立後数年を経て、一九九五年に導入された新たな学習指導要領に基づいて執筆された歴史教科書はヨーロッパ史あるいは世界史、クロアチア共和国・民族の歴史に加えて、その他の旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族の歴史を「アルプス＝バルカン地域」に包含して、ごくわずかに取

り上げるだけの三層構造となった。当然のこととして、本稿で考察している南スラヴ理念の系譜も、ほとんど言及されなくなった。総頁数が激減する中で「国民史」の突出ぶりだけが目についた。スニエジャナ・コレンは「他のものをすべて締めだす狭隘な民族的歴史観」をもたらずも⁽³⁵⁾のとして、このモデルを批判している。一九九六年には教科書の多元化（複数化）が始まったものの、取り上げるべき内容と方向性を学習指導要領が細部まで指示しているため、独自性を打ち出すのは困難であった。⁽³⁴⁾

しかし、二〇〇〇年に政権交代が実現すると、二〇〇一年度から次々と新しい歴史教科書が出版されるようになり、ユニークな教科書作成の試みが見られるようになった。さらに、二〇〇六年にクロアチア科学・教育・スポーツ省が「クロアチア国民教育基準」(HNSO: *Nivatski nacionalni obrazovni standard*) に基づく新たな学習指導要領を導入すると、⁽³⁵⁾これにあわせて多くの歴史教科書が大幅に改訂された。新たな学習指導要領は単元ではなく主題のみを提示した簡潔なもので、教科書執筆者にとっては自由裁量の幅が大きく広がった。もともと、この改訂で南スラヴ理念の系譜に関する記述が復活するようなことはなかったし、近隣諸国・諸民族に向けた「アルプス・バルカン地域」という地域概念は消滅してしまった。一時期ほどではないにせよ、依然として「国民史」の比重は高い。

それでは、クロアチアの歴史教科書には、スラヴ理念ないし南スラヴ理念の系譜について、何らかの記述は残っているのか。現行の

小学校七年生向け歴史教科書四種類のうち、とくにシュコルスカ・クニガ社のものを見ていくことにする。⁽³⁶⁾四種類の教科書すべてに共通するのは、南スラヴ理念はもとより旧ユーゴスラヴィア諸国に関連する記述もクロアチアと密接な関係を持つボスニア・ヘルツェゴヴィナを除けば非常に限定的であり、各国事情についてはほとんど描かれていないことである。これは連邦時代の教科書とは全く異なる点でもある。

シュコルスカ・クニガ社の教科書は、「クロアチア民族再生とヨーロッパにおける近代的民族の出現」という章の中で、「近代的民族」形成の一例としてセルビア人のケースを取り上げている。また、同じ章にある「クロアチアの少数民族」という節では、イタリア人と並んでセルビア人に関する記述がある。後者は以下の通り、連邦時代の教科書における南スラヴ理念の系譜に関する記述とある種の共通性を持っているように見える。

クロアチアにおけるセルビア人の民族意識の発達にはセルビア公国、のちの王国の民族的野心と反オスマン闘争が部分的に影響を与えたが、他の南スラヴ諸民族に協力的であったクロアチア（イリリア）民族再生運動も同じであった。南スラヴ理念の提唱者（リュデヴィト・ガイも含まれる）は南スラヴ人の、あるいはすべてのスラヴ人の民族的統一を想定していたが、それが実現することはなかった。

一九世紀半ば、セルビアの言語学者ヴク・カラジチとクロアチアの政治家で作家でもあるアンテ・スタルチュエヴィチの間で論争が起こっ

た。すべてのシュト方言の話し手（したがってクロアチア人の大多数も含まれる）は実際にはセルビア人であるというカラジチの主張に対して、スタルチエヴィチはセルビア人こそ不明確な起源を持つ民族であり、実際にクロアチア人の名称を帯びるべきだと主張して対抗したのである。⁽³⁷⁾

このカラジチとスタルチエヴィチの論争は、前述の通り、連邦時代の教科書にも載っている。同じ教科書の別の章でも、スタルチエヴィチは「クロアチアという共通の名称の下での南スラヴ人の統一を信じていた」⁽³⁸⁾と紹介されている。なお、かつては南スラヴ理念の系譜において注目されていた人物は、クリジヤニチやヴィテゾヴィチを含めて、ほとんど登場しない。グンドウリチやシュトロスマイヤー⁽³⁹⁾がかるうじてクロアチア人の文化的発展の文脈で登場するが、南スラヴ理念とまったく関連づけられてはいない。イリリア運動に関しては、上記の引用箇所を別にして、「イリリアという名称によってすべての地域的な名称を包含し、すべてのクロアチア人、のちには他の南スラヴ人をも一つの文化的単位に集結させようとした」⁽⁴¹⁾という記述に加えて、イリリアという名称が禁止された経緯について、ウィーン宮廷の認識として、「イリリアという名称が他の南スラヴ諸民族にも適用される可能性やイリリア主義が帝国におけるスラヴ人の政治的統一へと向かわせる危機感があった」⁽⁴²⁾という説明がある。

5. 現在の歴史教科書（2）その他の旧ユーゴスラヴィア諸国

それでは、スラヴ理念ないし南スラヴ理念の系譜に関する記述は、クロアチア以外の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書には残されているのであろうか。クロアチアと同じく、これらの国々のほとんどが教科書の多元化（複教化）を進めており、すべての教科書を網羅的に把握することは難しいため、ここでは各国の現状を概観することにとどめる。

まず、セルビアの場合、連邦時代の教科書とは対照的に、少なくとも小学校七年生向け歴史教科書には、南スラヴ理念の系譜に関する記述はほとんど存在しない。そもそも近隣諸邦の動向さえセルビア人との関連でしか登場せず、イリリア運動もシュトロスマイヤーのユーゴスラヴィア理念もまったく言及がない。ある教科書に「セルビア国家はセルビア人の統一だけを想定する。南スラヴ国家はセルビア人とクロアチア人とブルガリア人の統一を想定する。ユーゴスラヴィア国家はセルビア人とクロアチア人とスロヴェニア人の統一を想定する」⁽⁴³⁾という、やや不自然な注記が見られる程度である。一方、中世を扱う小学校六年生向けの歴史教科書には「南スラヴ人」という枠組みが多用されており、クロアチアのグラゴル文字やザダルの聖ドナト教会の紹介を含む「南スラヴ人の初期の文化」⁽⁴⁴⁾といった章が設けられている。近代史とは異なり、中世クロアチア王国など、この時期のセルビア国家以外の近隣諸国に関する記述もあり、とくにドゥブロヴニクが「南スラヴ人」の経済や文化に果たした役割を高く評価している。⁽⁴⁵⁾

また、モンテネグロの場合、歴史教科書にはバルカンまたは「南スラヴ人」という枠組みが用いられ、より広範囲の地域史的側面があらわれている。そのため、中世史（小学校七年生向け教科書）でも近世・近代史（小学校八年生向け教科書）でも、モンテネグロ以外の旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族の歴史が比較的詳しく描かれている。ガイのイリリア運動やシュトロスマイヤーのユーゴスラヴィア理念なども言及はあるが、ごく簡潔なものとなっており、思想的潮流として跡づけられているわけではない。

ボスニア・ヘルツェゴヴィナの場合、一九九〇年代の紛争の影響から、現在でも歴史教科書のあり方は同国を構成する連邦とセルビア人共和国で大きく異なっており、とくに連邦側では教科書は複雑に多元化（複教化）されている。全般的に、モンテネグロと同じくバルカン（南東ヨーロッパ）または「南スラヴ人」という枠組みが用いられ、地域史的側面があらわれているものの、その記述は非常に簡潔なものとなっている。ある教科書（小学校八年生向け）は、「ユーゴスラヴィア問題とボスニア・ヘルツェゴヴィナ」と題する節を設け、南スラヴ諸民族のオーストリア＝ハンガリーやオスマン帝国からの解放への志向が、ユーゴスラヴィア理念という「すべての南スラヴ人を単一の南スラヴ国家に統一する」という新たな理念を生み出した⁽⁴⁸⁾と記しているが、この理念の詳しい内容や系譜を取り上げてはいない。

マケドニアの場合、モンテネグロやボスニア・ヘルツェゴヴィナの事例と異なり、旧ユーゴスラヴィア諸国・諸民族史ではなく、近隣諸国と

してのブルガリア、ギリシア、アルバニアなどのバルカン諸国・諸民族史の側面が強調されている。近代史（小学校七年生向け教科書）においてクロアチアやスロヴェニアはまだしもモンテネグロやボスニア・ヘルツェゴヴィナさえ登場せず、当然ながら南スラヴ理念についてもまったく言及がない⁽⁴⁹⁾。

一方、スロヴェニアの場合、とくに近代史（小学校八年生向け教科書）において、南スラヴ理念と関連する記述が散見される。「汎スラヴ主義」とイリリア主義⁽⁵⁰⁾に加えて、オーストリア＝ハンガリー帝国のユーゴスラヴィアを含む三重制国家への再編を求める「新スラヴ主義」、南スラヴ問題の解決を帝国の解体に求める「プレポロド派」、スロヴェニア人を文化的（言語的）にクロアチア人やセルビア人と融合させようとする「新イリリア主義」⁽⁵¹⁾などの思想的潮流の説明が少なくない。

おわりに

これまで見てきたように、現在の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書においては、かつてのように南スラヴ理念の系譜に関する記述はほとんど無く、各国の歴史認識自体が大きく変化したことがうかがえる。結果的に南スラヴ諸民族の連帯よりも各々の国民国家を選んだこれらの国々にとって、もはやユーゴスラヴィアという国家の起源をたどることに意味を見いだせないのかも知れない。長らく実質的な意味を持って

たはずの歴史が、国家の消滅によって短期間に改変されてしまった実例でもある。冒頭に述べたように、現在の旧ユーゴスラヴィア諸国はヨーロッパ連合の境界地域として微妙な位置にあり、武力対立を伴うものではないにせよ、相互の関係は必ずしも良好とは言えない。それでも、歴史家をはじめとする教育関係者の働きかけによって、少なくとも歴史教科書の見直し作業は継続的に行われている。そうした努力が狭量な「国民史」一辺倒の歴史認識をあらためさせ、この地域に新たな協力関係が生まれる契機となることに期待したい。

注

- (1) *Povijest u Nastavi*, Zagreb: Društvo za hrvatsku povijesnicu, 2003-.
- (2) *Dijalog povijesničara - istoričara*, Zagreb: Zaklada Friedrich Naumann, 2000-.
- (3) Christina Koulouri, ed., *Clio in the Balkans: The Politics of History Education*, Thessaloniki: Center for Democracy and Reconciliation in Southeast Europe, 2002; Magdalena Najbar-Agičić, ur., *Klio na Balkanu: Usmjerenja i pristupi u nastavi povijesti*, Zagreb: Srednja Europa, 2005.
- (4) Sabrina P. Ramet, Davorka Matić, ur., *Demokratska tranzicija u Hrvatskoj: transformacija vrijednosti, obrazovanje, mediji*, Zagreb: Alinea, 2006; Sabrina P. Ramet, Davorka Matić, eds., *Democratic transition in Croatia: value transformation, education & media*, College Station: Texas A&M University Press, 2007.

- (5) Tihomir Cipek, Olivera Milišavljević, ur., *Kultura sjećanja: 1918. povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2007; Sulejman Bosto, Tihomir Cipek, Olivera Milišavljević, ur., *Kultura sjećanja: 1941. povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2008; Sulejman Bosto, Tihomir Cipek, ur., *Kultura sjećanja: 1945. povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2009; Tihomir Cipek, ur., *Kultura sjećanja: 1991. povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2011.

- (6) 柴宜弘編『バルカン史と歴史教育——「地域史」とアイデンティティの模索』(明石書店、二〇〇八年)。スニエジャナ・コレン「教科書の中の地域史——クロアチアの事例——」、ブレドラグ・マルコヴィチ「セルビアの教科書における地域史——隣人たちの沈黙——」、ソーニャ・ドゥイモヴィチ「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける歴史教育」、ペテル・ヴオドビヴェツ「一九九〇年以降のスロヴェニアの歴史教科書」など現地の専門家による刺激的な論考が多数掲載されている。

- (7) 南東欧における民主主義と和解のためのセンター (CDRSEE) 企画「クリステイナ・クルリ総括責任、柴宜弘監訳『バルカンの歴史——バルカン近現代史の共通教材(世界の教科書シリーズ三七)』(明石書店、二〇一三年)。四巻本で出版された共通歴史副教材(ワークブック)の英語版の全訳。英語版をもとにして、セルビア語版、ギリシア語版、クロアチア語版、マケドニア語版、ボスニア語版、アルバニア語版、モンテネグロ語版、ブルガリア語版がそれぞれの国で刊行されているという(監訳者解説による)。

- (8) Nobuhito Shiba et al. eds., *School History and Textbooks: a Comparative Analysis of History Textbooks in Japan and Slovenia*, Ljubljana: Inštitut za novejšo zgodovino, 2013.

- (9) 山崎信一「文化空間としてのユーゴスラヴィア」、大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門——歴史のラビリンクスへの招

- 待』(昭和堂、二〇一三年)。
- (10) ユーゴスラヴィア連邦時代の学校制度は小学校八年・中学校四年となっており、現在でもクロアチアとセルビアはこの制度を維持している。それ以外の旧ユーゴスラヴィア諸国は概ね小学校九年・中学校四年の新制度に移行している。このうち「歴史」は前者では小学校五年生から八年生、後者では小学校六年生から九年生の必修科目である。四年間にわたり四分冊の教科書を使って時代順に学んでいく。詳しくは、石田信一「クロアチアにおける教育制度の変遷——歴史教育を中心に」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』六(二〇〇八年)等を参照。
- (11) 例えば、Južni Slaveni / Južni Slovencei あるいは Južnoslavenski / Južnoslovenski に対しては「南スラヴ(人)」の訳語を用いているが、Jugoslaveni / Jugosloveni あるいは Jugoslavenski / Jugoslovenski に対しては「ユーゴスラヴィア(人)」の訳語を用いて区別している。同じく Jugoslavinstvo / Jugoslovenstvo も「南スラヴ主義」ではなく「ユーゴスラヴィア主義」としている。イリリア運動の担い手を指す Ilirac (Ilirci) は「古代イリリア人の 三巨」と区別するため、「イリリア人」ではなく「イリリア派」としている。また、多くの場合、narod と nacija は「人民」や「国民」などとせず、ともに「民族」の訳語を用いている。
- (12) Vasilij Popović, *Istorija novog vijeka (Jugoslavija i okruća) za IV razred realnih i klasičnih gimnazija i realki*, Beograd: Narodna prosveta, 1932, str.138-139.
- (13) Isto, str.140.
- (14) Isto, str.140-141.
- (15) Isto, str.141.
- (16) Isto, str.141-142.
- (17) Isto, str.142.
- (18) Isto, str.156.
- (19) Д. М. Сухотин, В. Г. Прикофьев, *История нового века за VIII разред средњих школа*, Београд: Заврпа професорског друштва, 1939, стр.159.
- (20) Dragutin Pavličević, Filip Rotrbica, Rene Lovrenčić, *Čovjek u svom vremenу: udžbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, 3. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988(1986)
- (21) Dragutin Pavličević i dr., *Čovjek u svom vremenу*, str.188.
- (22) Isto, str.189.
- (23) Isto, str.190.
- (24) Isto, str.58-59.
- (25) Isto, str.141-142.
- (26) Isto, str.185-186.
- (27) Isto, str.185.
- (28) Милутин Петровић, Мило Стругар, *Историја за VII разред основне школе, пето издање*, Београд: Завод за уџбенике и наставна средства, Нови Сад: Завод за издавање уџбеника, 1991(1987).
- (29) Isto, стр.83.
- (30) Isto, стр.170-173.
- (31) Isto, стр.83.
- (32) Isto, стр.172.
- (33) К. И. Чичинава・ロマン「教科書の中の地域史」二三四頁。
- (34) И. И. Белић, *Наставни план и програм за основни школи*, Zagreb: Министарство просвете и спорта, 1999 年参照: 217-218。
- (35) *Nastavni plan i program za osnovni školu*, Zagreb: Министарство знаности, obrazovanja i спорта, 2006.
- (36) Sijeran Bekavac, Simiša Kljajić, *Povijest 7: udžbenik za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Alfa, 2007; Krešimir Erdelja, Igor Stojaković, *Tragom prošlosti 7:*

- učbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2007. (15) Isto, str.162.
- Damir Agičić, *Povijest 7: učbenik za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil, (16) Isto, str.162.
2007. Damir Agičić, Snježana Koren, Magdalena Najbar-Agičić, *Povijest 7: učbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil, 2007. (17) Isto, str.163.
- (18) Krešimir Erdelja i dr., *Tragom prošlosti 7*, str.91.
- (19) Isto, str.148.
- (20) Željko Brdal, Margita Madunić, *Tragom prošlosti 6: učbenik povijesti za šesti razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2007, str.224.
- (21) Krešimir Erdelja i dr., *Tragom prošlosti 7*, str.146-147.
- (22) Isto, str.78.
- (23) Isto, str.84.
- (24) Радослав Ђушић, *Историја за седми разред основне школе*, Београд: Завод за уџбенике, 2009, стр.130.
- (25) Радле Михаљчић, *Историја за шести разред основне школе*, Београд: Завод за уџбенике, 2008, стр.53-55.
- (26) Исто, стр.103.
- (27) Жижко М. Андријашевић, Саит Шабогић, Драгутин Паповић, Слободан Дробњац, *Историја за осми разред деветогодишње основне школе*, Подгорица: Завод за уџбенике и наставна средства, стр.64.
- (28) Исто, стр.82.
- (29) Леопард Валента, *Historija – Povijest za 8. razred osnovne škole*, Sarajevo: Bosanska riječ, 2007, str.60.
- (30) Блаже Ристовски, Шукри Рахими, Симо Младеновски, Стојан Киселински, Тодор Чепреганов, *Историја за VIII одделение*, Скопје: Алби, 2005.
- (31) Јанез Свим, Елизабета Нибершек В., Андреј Студен, *Котак в џаси. Нови век. Zgodovina za 8. razred devetletke*, Ljubljana: DZS, 2004, str.94.